

※当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

【研究会報告】

AA 研共同利用・共同研究課題「南アジアの社会変動・運動における情動的契機」

2020 年度第 1 回研究会「南アジア研究における情動の諸相」

日時： 2020 年 5 月 24 日（日）13:00-16:30

会場： ZOOM 会議 ※非公開

共催： FINDAS（東京外国語大学南アジア研究センター）

プログラム：

◆ 栗屋利江（東京外国語大学）

「南アジア研究における情動：導入」

"Emotions in South Asian Studies: Preliminary introduction"

◆ 田口陽子（県立広島大学）

「情動のやりとりと社会身体の形成：人類学的な概念化と南アジアの変動」

"The transaction of affect and the formation of the "body social": Anthropological conceptions and South Asian movements"

報告 1：栗屋利江（東京外国語大学）

「南アジア研究における情動：導入」

"Emotions in South Asian Studies: Preliminary introduction"

本報告では、まず学問的関心が高まってからしばらく経つ「情動」に関して、同関心の政治・社会的背景、および欧米を中心とする先行研究の動向と概要が整理された。次いで南アジア地域を対象とし、情動に踏み込んだ研究の蓄積が、歴史研究分野（ナクサライト、レズビアン運動、フェミニズム運動、テランガーナー運動、母語をめぐる運動など）、政治分野（コミューナル暴動、ダリト運動、検閲の問題など）、その他の個別テーマ（Love、男女関係、猥褻など）といった領域から紹介された。これまでの情動研究の中に、情動の歴史の変容を対象とする方向性と、政治的局面における情動の働きに注目する方向性という、大きく分けて二つの方向性があることが示され、双方に同時に注視すべきことが指摘された。さらに、情動研究に際して、学問領域を横断した研究者間の共同作業、従来の文学研究との差異化の可能性、南アジア固有の問題（個ととらえ方、コミュニティの機能、植民地支配の体験など）、研究手法、資料などについて具体的な提案がなさ

れた。

報告2：田口陽子（県立広島大学）

「情動のやりとりと社会身体の形成：人類学的な概念化と南アジアの変動」

"The transaction of affect and the formation of the "body social": Anthropological conceptions and South Asian movements"

本報告では、まず人類学における社会空間と情動に関する研究が紹介された。その上で、情動概念は身体的な存在としての人間が周囲と相互作用することで生成される実践に注目するものであり、そうすることで社会構造や法、政治理念などの枠組みからはみ出し、ずれていく実践に光をあてることができる、情動を通してこれまでとは違った角度から社会空間を捉えることが可能になる、との見解が示された。後半では、この見解をもとに、箭内匡が『イメージの人類学』の中で提唱した「社会身体（個人性を越えた身体の在り方）」論と、南アジアを対象とする人類学的研究の中で論じられてきた人格論（「分人」という概念、「サブスタンス＝コード」論など）を接続させる試みがなされた。

報告後、歴史学、文学、社会人類学、音楽など、多様な分野の研究者から各報告に対するコメントが寄せられたほか、各分野における「情動」研究の課題と可能性について活発な意見交換がなされた。